

飼餌料開発研究に取り組む－飼餌料グループとその同志たちの思いと戦い－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 剛史 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2006902

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



飼餌料開発研究に取り組む ー飼餌料グループとその同志たちの思いと戦いー



(養殖システム部：山本剛史)

飼餌料グループは6名の研究開発職員と、それを支える3名の契約職員で構成されていますが、およそ「飼餌料」と名の付く課題・問題の多くに対応が求められるため、研究所内外との連携の下で業務に取り組んでいます。

無理難題に取り組む

今年はここまで、来年はそこまでという計画を立て、着実に研究・開発を進めていくのが本来の姿ですが、参考となる知見に乏しい分野や、先人たちが取り組んでも解決できなかった問題に対応することも多くなっています。海水魚の種苗生産では、まず、大量培養が可能な動物プランクトンを与えますが、ウナギはあまり食べない、クロマグロは他の魚の赤ちゃんを食べないと育たないという大きな問題があります。このような問題児を育てるための人工飼料の開発に取り組んでいます。

緊急事態に対応する

養殖魚の安全性は、与える飼料の安全性を確保することから始まり、飼料に配合する原料・添加物は安全性が確認されてから使用されています。特に有害物質の飼料への混入や、魚への残留が懸念される場合には、農林水産省と連携して、どんなに多忙であっても迅速に飼育試験を実施して問題解決に対応しています。昨年度末から養殖実証グループとともに飼料添加物の残留性に関する調査に取り組んだところです。

垣根を作らない

養殖を取り巻く情勢は日々変化しており、また、問題も多岐に亘り、かつ、複雑化して

います。以前は栄養要求だけを考えれば良かった飼餌料研究も、1つの問題解決に魚病、繁殖、育種など異なる分野との連携が必要になっています。飼料の主原料である魚粉の配合を減らさざるを得ない状況に対応するため、魚粉を減らした飼料の栄養価の改善とともに、そのような飼料でも育つ魚の育種にも取り組んでいます。

世に貢献する

養殖業という産業に貢献することを忘れてはなりません。また、飼餌料開発は飼育試験が基本ですので、研究グループだけでは対応できる課題が限られてしまいます。基礎的な研究成果や、これまで培ってきた経験を元に、産業に貢献するための次のステップに踏み出すことも重要です。元々が養殖用飼料の研究が中心で知見もかなり蓄積してきたことから、養殖実証グループ、水産試験場および飼料メーカーとも連携して、魚粉を削減した飼料の開発に取り組んでいます。

ここに書いたことは理想であり、十分実践できている訳ではなく、かつ、苦虫を潰したような顔で取り組んでいます。いつの日か笑顔で取り組めるように、自分磨きも忘れないようにしたいと思います。



写真左、古満目庁舎で低魚粉飼料を与えたカンパチ幼魚の個体判別作業；写真右、和歌山県水産試験場内水面試験地で魚粉削減飼料を与えたアユのサンプリング作業